

# 小規模事業主の内面的な障壁を考慮した新たな DX 推進手法の提案

長濱由成（ながはま よしなり）  
藤井伽璃（ふじい かりん）  
森 愛稀（もり あいき）  
山口大学国際総合科学部

## 1. はじめに

この度は 2025 年度年次大会の優秀萌芽研究賞に選出していただき、大変光栄に存じます。同大会ではオンラインでありながら多方面の方々からご意見を頂戴し、今日の研究の発展につながる機会を得ることができました。この場を借りて、大会に携わっていただいたすべての皆様に感謝申し上げます。また、本稿では受賞者を代表して、長濱の立場から研究の概要やその裏側について簡素ながら記させていただきます。

## 2. 研究概要

本大会にて発表した研究の最も根源的なイシューは「なぜ小規模事業主の DX は進まないのか」というものです。小規模事業主と呼ばれる企業は従業員が 5 人程度の小規模な状態で運営されている企業のことであり、彼らの DX は大企業や中規模企業に比べて遅れていることが知られています（図 1）<sup>1)</sup>。そうした状況の背景にある要因はすでにいくつか先行研究で挙げられており、時間不足やお金不足、経営者の意識不足など多岐にわたります。しかし、俯瞰してみると今挙げたような要因は際限がなく、根本的または即時的解決には中々つながらないのが現状です。そこで、我々はまだ見つかっていない因子、落とし穴が存在しているのではないかと検討を始めました。その結果、DX の導入段階と効果測定の段階に問題があること、DX に対する小規模事業主の捉え方が外部で支援する専門家などとは違っていることの 2 点が挙げられると考えました。前者においては自社で DX 状況を診断するツールが小規模事業者向けに作成されていないことによるミスマッチが存在し<sup>2)</sup>、後者においては小規模事業主の捉える DX は専門家の定義するデジタイゼーションに当たると

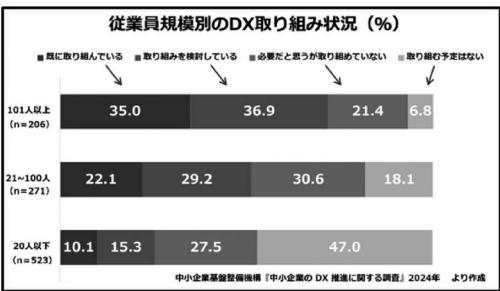


図 1 従業員規模別の DX 取り組み状況

いった概念的なズレが存在します。これら 2 つをまとめると、小規模事業主が個々に捉える DX という姿を適切に記述できていないことが現状の DX 推進を妨げている要因ではないかと我々は推論づけました。これは技術に造詣の深い従業員が少ないからこそ起きる小規模事業主特有の悩みでもあります。

では、小規模事業主の DX に対する捉え方をどのように可視化できるか。私たちの関心はこの段階に移りました。当然ながら、これは相手の知覚世界をみるものなので、簡単ではありません。しかし、同様の課題をさらに大きい形で記述しようとした人物にユクスキュルという方がいます。彼の提唱した「環世界」という考え方は個々の生物には個々の世界があって、個々の規則や機能によって構成されている、というものです<sup>3)</sup>。個々の知覚する世界はその個々自身でしか感じ得ない、というのは先ほど挙げた DX における小規模事業主と外部支援者の関係に類似する点があります。そこで、我々は DX における環世界を「デジタル化環世界」と称し、前述のさまざまな 2 者間の理解の溝を埋めようというアイデアを本大会において発表させていただいた次第です。

### 3. 研究に至る経緯と現在の状況

現在は先のテーマで引き続き研究を進めており、デジタル化環境世界の描写を進めています。まだまだ実用に向けては多くのデータと実験が必要になりますが、小規模事業主の捉える DX と彼らが辿っていく DX の経路を俯瞰して見るができるようになり、当初のアイデアが概ね実現できるようになってきたというのが現状です。これに際して、本学会の 2025 年度全国大会でも発表させていただくことが執筆段階で決定しております。今後とも本学会に関わるすべての皆様からのご指導ご鞭撻のほどよろしくお願い申し上げます。

最後に研究に対する私個人の考えとビジョンを記して結びとさせていただきます。本研究の概要をお読みいただいた方や以前から DX などの分野に関心のある方であればお気づきの通り、小規模事業主の DX はその難しさと必要性の観点から是非を議論する声も多いと思われます。なぜなら、大企業に比べて DX に対する負担ばかりが多くリターンは少ない場合が多いからです。全社一斉のような基幹システムを導入する必要もありませんし、個人用のクラウドでも容量が足りるような企業も少なくないでしょう。ですが、COVID-19 の到来以降、私たちはパンデミックがこれからも起きうる未来を常に想定しなければなりません。その中で、業態変革が行われデジタル空間でも十分に事業が継続できることは我が国の経済だけでなく事業主とその関係者の皆様の生活を守ることに繋がります。

さらに少し私的な意見を述べると、小規模事業主の DX に「意味がない」という声で一蹴することは簡単であると筆者自身感じています。しかし、それ以上に「意味がない」に対する反抗心が昨今はより一層重要なのではないかと日々感じるのです。たとえば、DX・デジタル技術の面においても昔は一部の限られたユーザーがコンピュータに触れる時代にありましたが、今では全員のポケットにはスマー

トフォンが入っています。プログラムも現在は生成 AI の補助や、ノーコードでアプリを制作する環境も整いつつあります。このような変遷を見ると、「意味がない」という声がどの部分にフォーカスを当てて話されているかを私たちは注視しなければなりません。特に、その諦観が技術的な課題に起因するものであれば、今後数年～数十年の間に解決する可能性は大いにあります。その場合、残された課題は DX を行う本人と周囲の支援者の気概によるものであり、DX-ready な環境を早期から育めばこれらの促進も不可能ではありません。「意味がない」という切れ味は確かに鋭く私たちを引き寄せますが、その裏側で失っていく未来への火種もあるはずなのです。少し話が横道にそれてしまったかもしれませんが、私たちの行っている研究がそうした「意味がない」に対するひとつの抗いとして世の中に何か貢献できればと考えています。

この度はこのような寄稿の機会を与えていただきありがとうございます。経営情報学会に携わるすべての皆様に改めて感謝を申し上げ、本稿を締めさせていただきます。

#### 参考文献

- [1] 中小企業基盤整備機構『中小企業の DX 推進に関する調査』2024 年。
- [2] 福田大真・山戸昭三「小企業向け IT 経営および DX 推進プロセスの検証」『第 29 回春季研究発表大会予稿集』国際 P2M 学会、2020 年。
- [3] ユクスキュル・クリサート『生物から見た世界』岩波書店、2005 年。

#### 略歴

長濱由成（ながはま よしなり）

藤井伽璃（ふじい かりん）

森 愛稀（もり あいき）

3 名とも山口大学国際総合科学部在学中。